三木シンポジウム講演レジュメ　　2009.7.18

演題　身体における植物的なるもの　－三木形態学からの遺訓

金　子　　務（大阪府立大教授）

西田哲学と三木：手と目、＋舌

西田幾多郎が、晩年の論稿「生命」（「哲学論文集」第七、岩波版全集第――巻所収）のなかで、身体を「自己自身の内に自己表現的要素を含んだ組織」と規定し、その身体を貫いている知的直観的論理は手に表れ、弟子である眼を従えて理解の器官へと特殊化するという。手を＜外部的脳髄＞、脳を＜内部的手＞とも呼んだ。手は自己自身を特殊化する＜生きた一般概念＞であるとし、目は手の弟子として、手と目が結合して、創造の器官から理解の器官へと移っていくのである。

このような目と手の相関に関して、解剖学者・三木成夫は舌を加える。

ものの形を把握する筋肉は何か、それは舌・手・眼の筋（舌筋・上腕筋・眼筋）だというのである。三木さんは、そのことを、サメとヒトの頭部の比較解剖によって、脊椎動物ではこの三種の筋が、頭尾方向に並んだ頭部の筋節に由来する兄弟関係にある。

舌筋では、後頭部の筋節から前腹側に伸びる舌下神経支配の腹側筋が、魚類では鰓下筋に、陸上動物では補食のため「喉から手が出る」ように、付着点を通り越して舌として迫り出したもの。その後方の筋節の腹側筋は、魚類では胸鰭を動かす腕の筋肉となり、陸上動物では上肢を動かす筋肉になった。また眼筋は、頭部最前方の筋節の背側筋に由来する。

三種の筋は味覚・触覚・視覚の感覚の担い手に。人間の成長過程でも、舌によるなめ回し（三ヶ月）、手でものを掴む（六ヶ月）、眼でなめ回す（一年）という段階を踏む。こうして形態把握能力が深まるのだが、三木さん流の表現でいえば、眼は＜眼窩の中の舌＞、舌は＜口の中の腕＞、腕は＜突き出した眼＞である。三木原図（『生命形態学序説』・体節と鰓節のメタモルフォーゼ）。

植物器官と動物器官の相関構造

身体知に関連する、三木さんの口癖。「動物とはいわば＜胃袋と生殖器＞（植物器官）に＜目と手足＞（動物器官）がついたもの」：互いに依存し合った「二者一組」の双極的な存在。

《まず植物器官は、その細胞原形質に宿された生命記憶の、いわば声なき声に促され、食と性に関する時節の到来と目標の方向を地球的な規模のもとで察知しながら、その営みにたずさわる器官系》《動物器官は、こうした時空的な「遠の観得」を、その「近の感覚」の杖に縋りながら、具体的な推進運動として、これを実現してゆく器官系》（『生命形態学序説』83 頁）》

これがまた文明批判と人類の運命への警告に繋がっていくのが三木形態学の魅力。脊椎動物における進化過程から両器官の「勢力の均衡点が互いに移動する大きな流れ」を読み取る。

《人類の歴史において、生の中心が「心臓」から、しだいに「脳」に移行してゆく、といわれるのは、そのひとつの現れと見られるが、＜あたま＞が＜こころ＞の声に聞き入る「生中心の思考」が、＜あたま＞が＜こころ＞の声を聞き失う「ロゴス中心の思考」に、しだいに覆われてゆく、思考変革の歴史的な傾向を意味するものと考えられる。そこには、しかし、動植物両器官の持つ本来の双極的な関係が、支配と被支配の主従的な関係　に変貌をとげる、ひとつの危険性が秘められていることを忘れてはならないであろう》

ここから明らかなように、三木さんの立場は唯脳論でも無脳論でもなく、脳に代表される動物器官と心臓に代表される植物器官のバランスを重視するものである。身体的配置の意味を忘れることに、三木さんは警告を発している。「思う」は＜田＞（脳を上から見た象形）が＜心＞（心臓の象形）と相談している図である、との意義を念頭に入れておかねばならない。身体知の意義を強調する立場から言えば、三木さんの提示する知見は極めて示唆に富むというべきであろう。